

なり、生活も順調で現在に至っている。

私の人生の中での南方従軍（特にガダルカナル島の戦闘参加）とソ連抑留の辛苦は、一生忘れることのできない出来事である。

ソ連抑留記

千葉県 白駒 政夫

昭和二十年八月十五日終戦となり、我々は横道河子で武装解除され牡丹江に集結させられた。一個大隊二千名ずつ編成の上、五個大隊でソ連の命令により、近くの鉄道の駅まで行軍が行われた。数日後到着したところはニコリスク地区であった。

そこが第二集結地であり、収容所は天幕作りの簡単なものであった。その間、ソ連の給食を受けたが、ほんの少量で腹が減り、全く困ったことでした。小さい黒パンとスープだけでは日本人の空腹を満たしてくれなかった。

一夜明けた朝、点呼が行われた。早速ソ連軍の命令で、作業区分ごとに班の編成が行われた。農場に行く者、貨車の積み下ろし、大工作業、その他炭鉱に行く者など多種多様。私は炭鉱作業に回された。初めは炭鉱に入ると山鳴りがしてこわかったが、数日後には慣れて不安ながら作業ができるようになった。作業は一日三交代で、一交代は八時間勤務であった。作業も大変だが、食糧の配給が少ないのが一番困った。一カ月ぐらいするうち、病人も多数出始めた。栄養失調という病気が多かった。炭鉱も二、三カ月すると抗外作業者との交代が行われた。

農場作業にも回されたが、秋は馬鈴薯掘りも行われ、空腹のため、現場で生で薯をかじり空腹を凌ぐ日が続いた。食べてもうまくはなかったが仕方がなかった。夜収容所に帰り、夕食後しんみりとしたところは毎日祖国のことが思い出され、ほんとうに我々は日本へ帰れるのかどうか大変に心配であり、頭がおかしくなり、かといって自決するのも考えものであり、その上、強制労働と不安の続くうち、ついに四年が過ぎた。自分

ながらよく命が助かったものだと思つた。過ぎた歳月が苦しかつただけに、喜びも大きく感じた。食糧事情もソ連へ入った当初より年々少しずつよくなり、気候や作業にも慣れてきたが、やはり異国はいやでした。

長い抑留生活、四年後ソ連軍の命令で、昭和二十四年九月十八日舞鶴港へ上陸、復員、帰宅できた喜びは忘れられないが、しかし、ソ連抑留の苦勞も忘れることはできない。

今後は戦争はすべきでなく、平和であつてほしい。異国の地で無念に亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

我が空白の青春

新潟県 関口義作

悪夢のような、八月九日、四十九回目その日が今年もまためぐつてきた。私たちの命運をかけたソ連軍の不法侵入の日である。

私はちょうど衛兵勤務の日であつた。九日午前零時五十分ごろ、突然異様な爆音がソ連領方向より聞こえてきた。仮眠中の兵員全員哨舎外に飛び出し、警戒態勢に入った。間もなく薄暗い空に数十機の軽爆撃機らしき編隊が清津、羅南方面に向かって突進して行つた。早速中隊本部に報告し、なお散発的に飛来する敵機に迎撃態勢をとつた。既に清津港、羅津は猛烈な空爆に曝されていた。

最初は米軍機かと思つていたが、それは、あまりにも情報不足の前線兵士の無知と、上を信じて忠誠一途に生きてきた若者たちの判断だつた。

未明になると隣接地区の咸林山の展望哨が砲撃され始め、その砲煙と砂塵で山形が確認できないほどすさまじい砲撃だったが、健気にも監視所の重機が一銃応戦していたのもつかの間で、やがて沈黙した、おそろく全員無念の最期を遂げたことだろう。

そのころになつて敵は米軍でなく、ソ連軍がわが国との不可侵条約を破棄して攻撃してきたことが知らされた。いつかはと覚悟していたものがついにきたのだ。